

# 共同礼拝

2024年2月11日(日) 午前10時30分

午後4時

司式 牧師 姜 徑米

奏楽 佐藤裕子 香西愛

前 奏

招 詞 詩 編 103編1～2節

讃 詠 546

主の祈り

聖 書

イザヤ書 35章3～10節(旧1116)

マタイによる福音書20章29～34節(新39)

祈 禱

使徒信条

讃 美 歌 16

説 教 「見えるように」 牧師 高橋和人

祈 禱

讃 美 歌 270

献 金

頌 栄 541

祝 禱

後 奏

起立が困難な時は着席のまま礼拝します。  
礼拝は前の方から静かに着席しましょう。

## 2月の祈り

礼拝に向けての日々の歩みと心備えが常に導かれるように。

被災地の教会の伝道者・信徒が守られ、教会の復興が支えられるように。救援にあたる人々の働きが力づけられるように。

寒さ厳しい中であって。高齢、また、体調などにより礼拝に集うことがかなわないでいる兄弟姉妹たちを覚えて。

戦争と紛争の地に平和がもたらされるように。

## 今日の祈り

この社会に信教の自由が保障され、特定の宗教思想が優遇され、支配、弾圧、差別がなされないことのために祈ります。

愛する家族を主の御許に送った人々に、主が寄り添い慰めが与えられるように。

能登半島の震災の被災者、教会と教会員が守られるように。

病を負う兄弟姉妹とそれを支える人たちが守られるように。

「見えるように」 高橋和人

マタイによる福音書20章29～34節

14日は灰の水曜日、レント、受難節が始まる。主イエスの御受難の歩みに心を寄せる日々になる。慌ただしい日常が続く。むしろそこでこそ主の十字架を想う必要がある。

エルサレムを前に二人の盲人が登場する。9:27-に重なる。それは、山上の説教の後十二人の弟子たちを選ぶ前であった。主イエスと弟子たちの歩みが始まる場所であった。主イエスの旅の柁になっている。主はヨハネの弟子にご自分が「目の見えない人は見え」11:2-6とイザヤ35:5の実現を語った。

主イエスが来るべき方であることを示す。

エリコの町を出てエルサレムに入る前、主は大勢の群衆を従えている。華々しい様子だ。そこに二人の盲人が叫び出す。

道端に座って、物乞いをしていた。そこはエルサレムからの帰り道。物乞い以外に生きるすべはなかった。二人の関係は記されていない。同じように生きねばならなかった。主イエスを通ることを聞き、彼らは叫ぶ。語順は「主よ、憐れんでください、ダビデの子よ」である。

彼らには求めるべきものが見えている。「主よ、憐れんでください」は礼拝の言葉となった。礼拝は主の憐みを求める者に開かれている。

そして「ダビデの子」と呼ぶ。メシアの称号となる。彼らは黙らせようとする人々に先じて、主でありダビデの子である方、救い主を認める。

ヨハネで生まれつきの盲人を癒されたとき、主イエスは「見えなかったのであれば、罪はなかったであろう。しかし、今、『見える』とあなたたちは言っている。だからあなたたちの罪は残る」(ヨハネ9:41)と言われた。盲人たちは「見えないこと」「憐みの必要なこと」を知っている。

主が「何をして欲しいか」と問われ、「目を開けて欲しい」と願う。「開く」は天(3:16)、門(7:7)、婚宴の扉(25:11)、墓(27:53)と神の領域が開かれることにある。彼らは何よりも主イエスを見ることを願っている。主イエスは憐み、見えるようにし、従ってくることを許された。彼らは主の受難を見ることになった。

現代は多くのものを見せるが、見えないもの、見なければならぬものを教えない。見えていないのは自分と主の憐みが必要なことだ。罪を認め救いを求めることがなければ、自分は見えない。しかし主は御自分の十字架の道を見せてくださる。